

# 宇治群島宇治島のナンゴクアオイ (*Asarum crassum*) の分布及び特徴について

立久井 昭 雄\*

Distribution and characteristics of *Asarum crassum* on  
Ujijima Island, Kagoshima Prefecture.

Akio Tachikui

カンアオイ属 (*Asarum*) は、日本に基本種が約39種、亜種まで含めると90種近くあるといわれる。鹿児島県には、改定鹿児島県植物目録 (初島住彦編) に16種2亜種が記載されている。地域的な固有種が多く、12種1亜種が固有種となっている。

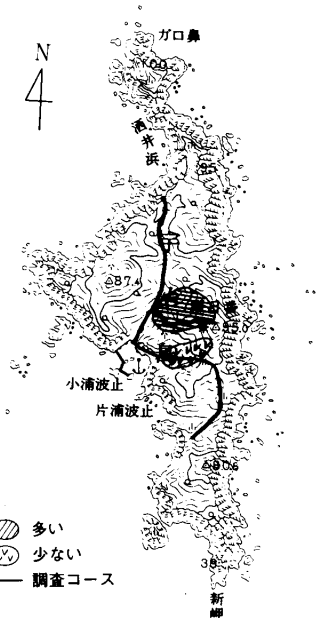
筆者は平成5年度から始まった鹿児島の自然調査事業の中で、宇治群島での動植物、地質の総合調査の機会を得、資料収集、植生調査を実施した際、ナンゴクアオイの自生状況を把握した。また、小さな蕾を着けた株を持ち帰り栽培したところ、開花に到ったのでここに報告する。

## 1 自生地での状況

ナンゴクアオイ (*Asarum crassum*) の自生地  
宇治群島は、笠沙町に属し、枕崎の西方約80kmの東シナ海上に浮かび、向島と宇治島 (家島) の2つの島と大小の岩礁からなる群島である。

筆者は大野照好 (鹿児島短大教授)、鮫島正道 (長崎鼻パーキングガーデン園長)、川窪伸光 (鹿児島大学助教授)、今増俊明 (博物館職員)、江平憲治 (博物館職員) 氏と共に、平成5年9月24日宇治島に上陸した。宇治島は周囲5km、面積6km<sup>2</sup>、最高点の南日岳が標高95mの無人の小さな島である。周囲は断崖絶壁の海食崖となっているため容易に近付けないが、南西部に避難港があり、ここからの入島は緩やかな谷部となっているため容易である。避難小屋があり、台風で窓が壊れるなど荒れてはいるが、穏やかな天候の時は十分宿泊できる。

避難港の南東部にある南日岳の頂上には無人の灯台があるため、避難港から道が通じている。標高20m当たりから低木林となり、タブノキ、モクダチバナ、ハマビワ、イヌビワ、シマグワ等が見られ、一部リュウキュウチクも入っている。樹木



調査コースとナンゴクアオイの分布

\* 〒892：鹿児島市城山町1-1 鹿児島県立博物館

が低いため林内は明るいが、林床にはほとんど植物は見られない。ただ目を奪われるのはナンゴクアオイの群落である。県本土でキンチャクアオイやサツマアオイの自生状況しか見ていない者にとっては、想像を絶する大きな株の群落である。1株に多いのは50枚程の葉を着け、葉1枚の大きさが大きいものは15cm、株の高さ40cmのものもある。低木林に入る付近から大きい株がいたる所にあり頂上まで同じ状態が続く。この内数株の株元を見て回ったが小さな蕾をほとんどの株が着けていた。この中の1株に1輪だけ花を着けたものがあった。これは他の株の状況から見て、極端に早いものと思われたので、小さい蕾を着けている株を花の確認のため持ち帰った。

島の北部から避難港に向かって小さい川が流れ込んできている。川の途中にミズイモの群落があるが、以前一時的に人が住んでいたことから植栽されたものであろう。この川に沿った流域は、谷部となっており、北からの風当たりが弱いいためハマヒサカキ、タブノキ、シマグワ等がやや高い樹冠をつくっている。とくにハマヒサカキが多く、ハスノハカズラ、ミヤコジマツツラフジ等のつる

植物もよく目につく。林床は南日岳と同じく貧弱であり、ミゾシダ、イシカゲマの幼植物と前述のつる植物だけである。土の水分が多い感じを受ける他は、南日岳とたいした変化はないようであるが、ナンゴクアオイは確認できなかった。

島の南部はほとんど断崖であるが、南側には海岸までおりられる緩やかな斜面が2カ所ある。避難港から海岸線沿いに南部の方に入っていったが、南日岳の南斜面は、やや乾燥した感じでリュウキュウチクも多い。ナンゴクアオイも見られるが、全体的に小さく株も点在している。尾根部は海岸から吹き付ける強い風のため、ハマヒサカキしか生育していないが、地に這うような樹形となっている。また、この周辺はハチジョウススキの大群落であったと思われるが、台風による塩害のためか完全に枯死していた。今回の調査は、大きな台風により大きな影響を受けた後だったため、崖地や風当たりの強い場所での植生が変化していたのは残念であった。



ナンゴクアオイの生える低木林



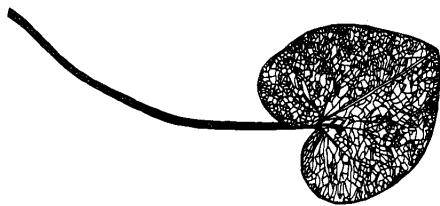
家島のナンゴクアオイ

## 2 ナンゴクアオイの特徴

### (1) 葉

25cm程の長い葉柄があり、径13cm程の円形で基部は心形。葉柄、葉の表裏共に毛は無く、表面は非常に光沢がある。葉だけ見るとトカラカンアオイと似ているが、葉脈が細かい脈まで裏面に突出しているため皺状に見える。

表面は濃い緑色で、裏面は淡緑色をしており、葉柄は紫褐色で、この色は葉裏の太い脈まで続いている。キンチャクアオイやサツマアオイでは、葉の表面に雲紋や亀甲紋の入るものが見られるが、ナンゴクアオイはすべて無地である。



### (2) 花

平成5年9月24日、宇治島の自生地ではほとんどの株が小さな蕾を着けていたので、葉5枚をつけた株を持ち帰り植栽したところ、12月に入り4個が開花した。移植による成長の遅れ等を勘案すれば、現地では11月頃から咲くのではなかろうか。一緒に栽培しているヤクシマカンアオイ、トカラカンアオイも同時期に開花している。

花柄は自生地で見えたものは長く花もやや上向きに咲いていたが、植栽のものは花柄1cm弱で、植込土に隠れるように咲いた。これは、自生地での多くの葉を着けている根元に咲くが、植栽のものは葉数も少なく、置場所が日陰ではあるが自生状態より明るいという条件の違いからきたものと思われるが、自生地での確認が必要である。花の形はキンチャクアオイと似ており、萼頭は12cm程の扁球形で毛は無く、上部に6列の膨出部がある。色は淡緑紫褐色で先の方はいちぢるしくくびれており、内面には横の隆起線がある。

萼裂片は広い卵形でやや開出し、先の方は鍵状に少し曲がり、長さは約1cmである。外側は暗紫褐色で、内側は濃い紫褐色をしており、縁には細かい毛が生えている。

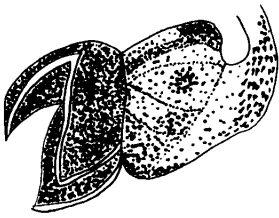
雄蕊は12個あり総て完全である。花柱は6個で円柱状をしている。子房は6室に分かれる。



家島で咲いていた花



栽培で咲いた花



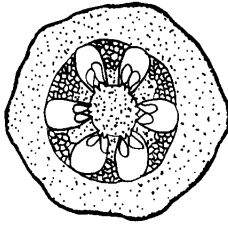
1



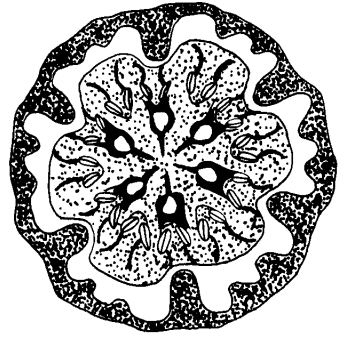
2



3



4



5



6



7

### 花のつくり

1. 全形    2. 縦断面    3. 萼裂片正面    4. 子房横断面    5. 萼頭横断面  
6. 雌蕊    7. 雄蕊

### 3 参考文献

- (1) 北村 四郎・村田 源, 1987. 原色日本植物図鑑草本編Ⅱ 320-326. 保育社  
 (2) 佐竹 義輔他, 1988. 日本の野生植物Ⅲ(Ⅱ) 103-109. 平凡社  
 (3) 初島 住彦, 1986. 改訂鹿児島県植物目録  
 (4) 初島 住彦, 山幡 英示, 1988. 有効に発表されていない日本産カンアオイ類. 植物地理・分類研究 第36巻 1-8